

「持田篤先生」

文京学院大学人間学部保育学科 小 澤 純

豊かな体躯，人なつっこい笑顔，よく響く声のバリトン，このような典型的男声声楽家の持田先生と出会って早くも 25 年が過ぎようとしている。初めてお会いしたのは文京の短大が立ち上がる時であったが，同じく声楽家であった私の母のお弟子が持田先生と同じドイツのデトモルトで勉強していた御縁でお名前は聞き及んでいた。その方と同じ職場とは誠に奇遇であった。この度先生が御都合で御退職なさる事になられたのを機縁に先生をご紹介する一文を書かせて頂く事にした。

先生は本年大きな地震により重大な被害を受けた事で知られる新潟県の柏崎出身と伺っている。地元の高専卒業後東京芸術大学音楽学部声楽科に入れられ，卒業後は直ちに大学院進まれ，終了後は西ドイツ国立北西ドイツ音楽大学に留学された。

また声楽科としてのスタートに当たっては NHK，毎日新聞共催コンクール第三位入賞，日伊音楽協会コンクール第二位入賞，バルセロナ国際声楽コンクール入選等輝かしい成果を上げられた。

そして音楽界では二期会正会員，東京室内歌劇場同人，日本フーゴー・ヴォルフ協会会員及び東京音楽大学講師として多くの後輩を育てられ，多大な功績を上げられた。東京音楽大学のお弟子からは多数のオペラ歌手が育っている。

歌手としての業績はまずなんと言っても 60 回におよぶ F.シューベルトの「冬の旅」の演奏である。全 24 曲から成るこの大曲をドイツの大学での演奏をかわきりに 30 年以上に渡って歌い続けた事は誠に希有な事であり，私も何度か聞かせて頂いたが，ドイツ語の表現の内面に深く立ち入った情感あふれるすばらしい演奏であった。他に先生は J.ブラームスを研究テーマとされ紀要論文での発表とともにリサイタルで 17 回以上取り上げられ，四重唱の演奏会でもたびたび取り上げられた。この二人の作曲家に対する愛好ぶりは並々成らぬものがある。ほかにも J.S.バッハのカンタータや W.A.モーツァルト，L.v.ベートーヴェンの作品への出演等枚挙のいとまが無い。

文京学園との関わりはなんと始まりは大学院の学生の頃と伺っている。その後広島大学に一

「持田篤先生」(小澤純)

時期転出されたが、文京短期大学保育科の開設に当たり教授に就任されてからは担当の音楽のみならず、短大時の保育科長、学生部長、大学移行後の学生委員長としての重責を果たされた。授業の思い出としては短大時の専任3人で競作した学生によるオペレッタ等楽しく思い出されるものである。又専門の声楽家としての能力をフルに発揮された女声コーラスでは一時部員が40名を超えるほどであった。

残念ながら体調を崩され授業を御休みされる事になり、この度女子大の終了と共に御退職される事になられた。永年の御厚誼を深く感謝するとともに、今後も親しく御付き合いさせて頂く事を願って、この拙なる文を贈らせて頂きたく思う。